

イエスはこれまで、苦しみを受けて神さまの元に帰る出来事を「わたしの時」と呼んできました。過越の食事とそこでの説教を終えて、ついにその時が来たことを、父なる神さまに向かって言い表します。その時が来たので、この時に「子に栄光を与えてください」と、イエスは神さまに祈り求めます。この福音書では、十字架の死とそれに続く出来事、復活こそが、「わたしの時」の内容であり、イエスの栄光が現される出来事とされています。ところで、この祈りをイエス自身の言葉とすると、祈りの中で本人が自分の名を、しかも「キリスト」という称号を添えて唱えるのは不自然です。生前のイエスは自分を「メシア」とか「キリスト」という称号を主張したことはありません。むしろ、この永遠の命の定義は、イエスをキリストと宣べ伝えていたヨハネ共同体の宣言と見る時、自然に理解できます。ヨハネ共同体は、ユダヤ人を核とする共同体として、当然イスラエルの神を唯一のまことの神として礼拝し、しかもイエスこそその神さまから遣わされた方であり、復活させられてキリストとして立てられた方であることを知り、かつ信じています。そして、この方を知ることが、すなわちこの唯一のまことの神を知ることであり、したがって、この復活させられたイエスと結ばれて生きるこそ永遠の命であることを体験し、告白してきました。その告白が、ここでイエスの最後の祈りの言葉として言い表されているのです。

そしてそれは、神さまとイエスとの間にある愛が、自分たちの内にあり、イエスが自分たちの内に生きていることを知っている人々の言葉、キリストと愛において一体の交わりをする人々が信仰をもって発する言葉なのです。また、言い換えれば、ここで、「知る」とは、「愛する」ということ、「信頼する」ということです。イエスが、私たちのために死んだことを知り、その命を捧げて下さる愛に打たれて、イエスを信頼する。イエスを自分の中に迎え入れる。イエスの中に自分の身を委ねる、共に歩む。そういう愛の交わりに生きる。それが、神さまと神さまが遣わしたイエス・キリストを知ることなのです。そして、その交わりの中にこそ、永遠の命があるとイエスは言い、また教会はそのイエスを信頼し、そのように告白してきたのです。この現実の中に込められている慰め、それを知ることを通して味わう喜び、それはまさに私たちの信仰生活を通して知っていくこと、知らされていくことなのだと思います。それはイエスが神さまとの交わりの中で味わっていた喜びです。復活させられたイエスに連なる者、キリスト者が味わう喜びは、この世が与える一時的な喜びではなく、外から受ける苦しみの中でも、外の状況とは関わりなく内からあふれる喜び、生の充実感なのです。